



華鼓

1971年生、神奈川県藤沢市出身。多摩美術大学日本画科卒業。10年間、高等学校の非常勤講師を務める。「すぐそこのたからもの」よしもとばなな(文化出版局)の装画やNHK「にほんごであそぼ」、うなりやペペ「へべんの紙芝居」(金の星社)の挿絵、ジュエリーデザイン、絵本制作など幅広く活動。絵本等の購入や、お絵かき教室のお問い合わせは下記のウェブサイトまで
http://www.sanpo-teketeke.com/

左)後ろの絵は制作に1カ月を費やした大作。「亡くなった母のことを思いながら描きました」。どこか華鼓さんの面影を感じる

華鼓さんの
お絵かき教室 ●週1回木曜16時～
●年長から対象 月3,500円

自由に発想することや物をよく観ること、絵を描く楽しさを伝えたいです



9Hから6Bを使い分けることで、同じ素材でも違う色味を出すことができますが、どこまでできるか挑戦しています。芯を粉にして墨のように使うこともあります」と華鼓さん

2016年に「空へのノート」、そして今年1月に「天の使い」と、2冊の絵本を自費出版した。「天の使い」は、名古屋市のジュエリーメーカー・CASHOの近藤嘉さんとの出会いがきっかけで誕生した。ジュエリー制作の経験が、華鼓さんの「空へのノート」に繋がっている。2冊の絵本は、それぞれ異なるテーマを持つが、どちらも華鼓さんの「空へのノート」に繋がっている。2冊の絵本は、それぞれ異なるテーマを持つが、どちらも華鼓さんの「空へのノート」に繋がっている。

鉛筆画を得意とするイラストレーターに

華鼓さんのイラストレーターとしての活動は、本の挿絵や装画、絵本製作、ジュエリーのデザインなど幅広い。「美大受験の予備校時代、壁一面に生徒の作品が貼り出されたとき、自分の鉛筆画の色がとてもしらキラして見え、「これだ」と思いました」と振り返る。鉛筆は黒一色だが、9Hから6Bまでを使い分け、単一白と黒だけではない繊細なタッチで描く。「イラストのモチーフは、目に見えない小人や天使が多いです。かわいくて不思議な存在。言葉が通じなくても気持ちちは分かり合えるかもしれないという存在です」。

結婚後、2児の母となり、夫の転勤で11年前に瀬戸市に引っ越した。好きな時に好きなだけ絵を描いていたが、育児中は時間が限られた。その中で、「自分のためではなく、人のために描きたい」と思うようになりました。家族の存在によって生きる意味を知り、より小さな幸せに目を向けることができるようになりました。がむしゃらに仕事を求めた時期もあったが、自分らしく作品を生み出していければいいと思えるようになった。「母は59歳で他界しました。その歳まで私にはあと10年しかありません。父と母、そして弟を亡くしましたが、私には家族から受け継いだ絵を描くというバトンがあります。生きにくいと感じている人の気持ちに寄り添う絵を描いていきたいです」と目にも力が入った。



「Love Amulet+心龍」は、愛の祈りを届ける心龍をデザインしたリング。パングルやペンダント、ヘアリング、ピアスをシリーズ展開している



Frame Collection「時空の隙間」は、瀬戸市の陶芸家・寺田聡氏による陶器フレームとコラボした作品。味わいあるフレームのデザインや質感とイラストの雰囲気マッチしている



華鼓さんが表紙絵や挿絵を手がけた出版物の一部。「すぐそこのたからもの」よしもとばなな(文化出版局)など



「天の使い」絵:華鼓 ことば:織田道代 見開きいっばいに描かれた竜のうろこには、人と人が出会い、家族となり永遠の愛にたどり着くまでが描かれている。(右は原画)「空へのノート」は、空の上の大切な人に想いを届けるためのノート。自由に書き込める罫線入り

巻頭特集 イラストレーター 華鼓 鉛筆画に思いを込めて 絵の向こうにある物語

瀬戸市在住のイラストレーター・華鼓さん。鉛筆で描く柔らかなイラストには奥行きがあり、繊細なモチーフの数々に見入ってしまう。描くことへの思いや、絵に込めたメッセージを聞いた。



画家一家に生まれ 美大を経て美術教師に

油絵を描く画家の父、自宅で絵の教室を開く母のもとに生まれた華鼓さん。家の中には、いつも絵具やクレヨンが転がっていた。「まさに美術室の中に産み落とされたよう。子どものころから、画材は惜しみなく与えてもらいました」とほほ笑む。同じく絵が好きで物心ついたときから自然に筆を手に入れた。

父親からは、目に見えないものを見て描くことを教えられた。「手を描くのに、『手だけを見るな、手にまっとうしているものを見て描け』と言われてました」と華鼓さん。そこから、対象物をじっくり観察し背景までを感じとるようになった。

「絵描きがいる家は独特。父は自分の世界に潜り込むことが多く、昼夜逆転も当たり前。子ども中心の家ではなかったかもしれない」と振り返る。高校卒業後は多摩美術大学へ進学し、日本画を専攻。卒業後、美術教師の道を選んだのは、画家一本で苦労する父親の姿も影響していた。非常勤講師として定時制や通信制、不登校の子どもたちの支援校など、いくつかの学校で教えた。「生徒たちは、色々な事情を抱えながらも夢をもちキラキラしている。たくさんのお会いが、私の人生を豊かにしてくれました」。

講師時代、午後は自身の創作活動に充て、現在の仕事につながっている。

作の背景にある物語を小冊子にし、購入者に届けた。その物語を次は絵本にしたいと思った。

「天の使い」は、神の使いとして降り立った竜が天使と出会い、旅をしながらお互いの存在する意味を見出していくストーリー。「迷っている人の背中をポンと押せるような1冊になればと願っています」。購入者ややりとりができ、反響が直接届くのが魅力。「家族を亡くした人から、「いいタイミングでこの本に出会えた。母から受け取った気がした」と感想をいただいたこともあり「目と目を細める」。

絵を描くというバトンを 家族から受け継いで

結婚後、2児の母となり、夫の転勤で11年前に瀬戸市に引っ越した。好きな時に好きなだけ絵を描いていたが、育児中は時間が限られた。その中で、「自分のためではなく、人のために描きたい」と思うようになりました。家族の存在によって生きる意味を知り、より小さな幸せに目を向けることができるようになりました。がむしゃらに仕事を求めた時期もあったが、自分らしく作品を生み出していければいいと思えるようになった。「母は59歳で他界しました。その歳まで私にはあと10年しかありません。父と母、そして弟を亡くしましたが、私には家族から受け継いだ絵を描くというバトンがあります。生きにくいと感じている人の気持ちに寄り添う絵を描いていきたいです」と目にも力が入った。